

## 巻頭言

宇宙科学研究所のミューザス-Cで回収する予定の、初めての小惑星サンプルを予備分析するチームメンバーも公募で決まり、宇宙開発事業団のH2Aロケットの発射も成功し、日本の惑星探査もこれからという時、日本惑星科学会の活動について、今一度振り返ってみてもよい時期ではないでしょうか。今年2回あった惑星科学関係の国際会議、ヒューストンでの第32回月惑星科学会議と、バチカンでの第64回国際隕石学会にも、正確に数えるのは難しいくらい多くの日本からの大学院生が参加しています。惑星科学会がまだ発足していなかった頃は、たったの2、3人の日本人出席者があっただけの会です。これには日本惑星科学会はどれくらい貢献しているのでしょうか。

大学制度の改革も一見進んだように見え、地球・惑星科学の表札を掲げる多くの専攻や学科ができましたが、いろいろ実情を聞いてみると、惑星科学に情熱を燃やし、合体したいろいろな分野の研究者が、一つのテーマの解決に向かって和気あいあいとやっているという例を多く知りません。人間というものは、近くで接する機会が多くなると、人事や予算のことで利害がぶつかり合い、話もしなくなるというようなことは、よくあることです。人と人をうまく結び付けるには、そのような事に長けた人の存在が、教室の合体よりも効果的と思われる。かつて惑星学会を作ろうと、名古屋、神戸、京都などに集った理論物理学、地質鉱物学、隕石学、地球化学の研究者たちの姿を惑星科学会ではあまり見かけなくなったように感じるのは、これらの人達が退官したばかりではないように思います。

惑星科学振興のためには、大団結する、そのための接着剤のような人々の活躍は、活性化に是非必要なものと思えます。長州も薩摩も幕府をも結びつけた人々の活躍は、新しい時代の扉を開けるのに不可欠のものでした。日本惑星科学会ができれば、それで新しい時代は始まったのではなく、惑星探査を主軸にした日本の惑星科学は、これからの本番です。月探査SELENE計画の成否も、宇宙関係3機関の特徴をどう生かして連結するかにかかっています。隕石も最近では南極だけでなく、暑い砂漠から面白いものが多数発見されています。小惑星からのサンプルも次々と回収されてくる時代が来ます。私はこのような惑星物質を扱う分野の仕事を多くしてきましたが、惑星科学会で話が聞ける惑星形成論や、隕石の年代決定で共通テーマのある同位体地球化学者などから、多くのアイデアを頂きました。

今後の惑星科学会の活動は、このような多くの小さな異分野の人々の参加を促すような方策が必要ではないかと感じているこの頃です。最近のテロ事件でクローズアップされた、一人勝ちのアメリカ合衆国と、少数民族の係わり合いを見ていると、私のような鉱物学という小分野の人間と、惑星科学分野の関連が頭に浮かびます。これは一昨年琉球王府で一年間過ごしたためばかりとは言えないようです。

武田 弘 (千葉工業大学附属研究所)